ISSN 0418-2642

# QR Newsletter
# 第四紀通信

Vol. 2 No.2, 1995

1995年１月17日兵庫県南部地震の地震断層（説明 p. 8）

**Vol. 2 No. 2** **March 10, 1995**


学会からのお知らせ
（1995年大会第２報、地球惑星科学関連学会合同大会） -- 2
集会報告（兵庫県南部地震調査速報会、他） -- 6
国際集会のお知らせ（INQUAベルリン大会、他） -- 10
CLIP-EPECからのお知らせ -- 13
研連報告 -- 14
学術会議だより -- 15


日本第四紀学会 *Japan Association for Quaternary Research*

# 日本第四紀学会　１９９５年大会（総会・研究発表会）［第２報］

1995年度日本第四紀学会大会は下記の要領で開催されます。
巡検の申込み等は第３報でお知らせいたします。

## １．日　程

1995年8月25日（金）　一般研究発表
8月26日（土）　一般研究発表・総会　［終了後：懇親会］
8月27日（日）　シンポジウム
8月28日（月）・29日（火）　巡　検

## ２．会　場

新潟大学教養校舎
大会準備委員長：青木　滋（新潟大学積雪地域災害研究センター）

## ３．シンポジウム

テーマ：「平野の自然と人類史－越後平野を例として－」
世話人：小林巖雄（新潟大学）ほか

## ４．巡　検

テーマ：「新潟の古自然環境（頚城・糸魚川・青海地域）」
世話人：鈴木郁夫（新潟大学）ほか

## ５．事務局

〒950-21　新潟市五十嵐二の町8050　新潟大学理学部地質科学教室気付
日本第四紀学会1995年大会準備委員会（事務局長　立石雅昭）

## ６．一般研究発表の申し込み

一般研究発表・ポスターセッションでの発表を希望される方は，綴じ込んである「発表申し込み用紙」（コピーでもよい）に所定の事項を記入のうえ，下記「８．講演要旨の原稿の書き方」にしたがった原稿およびそのコピー１部を，**５月２６日（金）**（必着）までに行事委員会までお送り下さい。原稿の受理をもって受け付けといたします。一般研究発表・ポスターセッションを合わせて１人１件です。発表時間を厳守していただくために，スライド・ＯＨＰとも８枚に限らせていただきます（両方使用する場合には，合わせて８枚）。十分な討論時間を希望する方には，ポスターセッションへの申し込みをお勧めいたします。一般研究発表・ポスターセッションともに講演要旨集に２ページ執筆していただきます。

講演要旨集の原稿の送付先
〒338 浦和市下大久保255　埼玉大学教育学部地理学教室内
第四紀学会行事委　斉藤享治 あて　（048-858-3195）

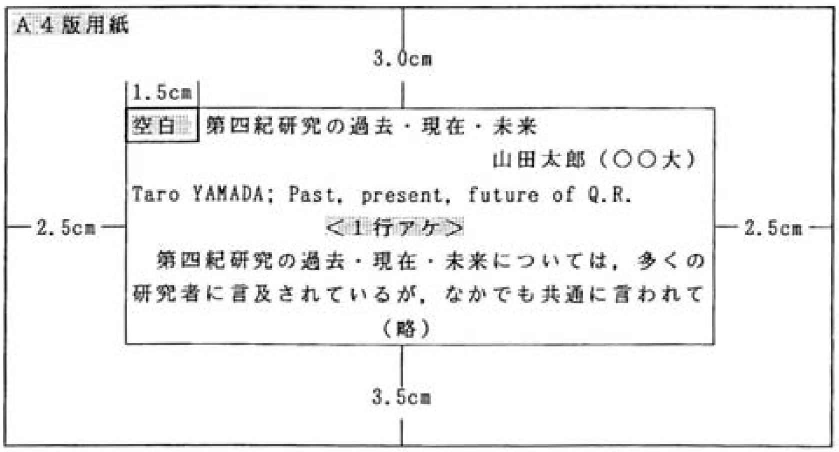
## ７．シンポジウムの原稿提出

シンポジウムで発表される方は，「８．講演要旨の原稿の書き方」にしたがった原稿およびそのコピーに，「発表申し込み用紙」（コピーでもよい）を添えて，5月26日（金）までに上記の行事委員会までお送り下さい。原稿枚数は２ページまたは４ページとさせていただきます。

**8．講演要旨の原稿の書き方**

原稿用紙は，発表者各自が用意した**Ａ４版白紙**を，横書き・立て置きで使用して下さい。左右各2.5cm，上端3.0cm，下端3.5cmは，空白にして下さい。表題・著者名は，（例）のように，和文表題・著者名（所属），英文著者名・表題の順に書いて下さい。和文表題は，１行目の左側を1.5cmあけて（左端からは4.0cm），左詰めで書いて下さい。２行にわたる場合にも，1.5cmあけて左詰めで続けて下さい。和文著者名は，和文表題のあと改行して，発表者を筆頭に右詰めで書いて下さい。２行以上にわたる場合でも，右詰めにして下さい。所属は，和文著者名のあとカッコをいれて簡潔に書いて下さい。
英文著者名・表題は，和文著者名のあと改行して，左詰めで著者名・表題の順に「；」でつなげて書いて下さい（所属は不要）。本文は，英文表題の次の１行をあけて，書いて下さい。行数・字数は自由ですが，36行・35字程度を目安として下さい。

日本語ワープロを使用の場合には，濃く印字して下さい。手書きの場合は，黒色インクまたは黒色ボールペンを使用し，濃く細く書いて下さい。図表は，黒インクを使用し，原稿用紙に直接書くか，あるいは青色方眼紙・白紙・トレーシングペーパーなどに清書して枠内に貼って下さい。縮尺は，印刷時にＡ４版の原稿がＢ５版に縮小されますので，「何分の１」という表現はしないで，スケールを入れて下さい。




（きりとり線）

**発表申し込み用紙**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 氏名（所属）：<br>題　目 | | | |
| 発表内容<br>（簡単に書いて下さい。講演要旨集には載りません。） | | | |
| 連絡先 | 〒 | | TEL |
| 発表の種類<br>（〇をつける） | 一般研究発表 | ポスターセッション | シンポジウム |
| ｽﾗｲﾄﾞ・OHPの使用（〇をつける） | スライド<br>（８枚以内） | スライド＋ＯＨＰ<br>（８枚以内） | ＯＨＰ<br>（８枚以内） |

# 1995年地球惑星科学関連学会合同大会（第２報）

前号でお知らせしましたように，1995年度の地球惑星科学関連学会合同大会が1995年 3月27日～30日の間，日本大学文理学部（東京都世田谷区）において開催されます．今回日本第四紀学会としては初めてシンポジウムを提案し，シンポジウム共催学会として参加することになりましたので，関連のシンポジウムについて詳しくご案内します．　また，3月28日午後には兵庫県南部地震・緊急フォーラムが特別に開かれることになりました．これは関連学会の代表的研究者の招待講演によるもので，一般にはポスター発表についてのみ募集中です．この緊急フォーラム開催のため，第四紀学会提案のシンポジウムは 3月29日午前に変更となりましたのでご注意下さい．

## １．1995年地球惑星科学関連学会合同大会の概要

1995年 3月27日（月）～30日（木）

会場：日本大学文理学部（〒156 東京都世田谷区桜上水 3-25-40）

新宿より京王線利用，下高井戸または桜上水駅下車，徒歩10分）

この４日間に，シンポジウム，共通セッション，固有セッション，特別講演会，緊急フォーラム等が行われます．

## ２．第四紀学会提案シンポジウムについて

シンポジウム「湖沼堆積物 －地球環境変動の”高精度検出計”－」

Lake sediment － high-resolution recorder of earth environmental changes－

コンビーナ：遠藤邦彦（日大），石渡良志，福沢仁之（都立大），井内美郎（地調）

期日・時間：3月29日 9時00分～12時15分 於：日本大学文理学部３号館Ｈ会場

プログラム

【シンポジウムの趣旨】

9:00-9:05　遠藤邦彦（日大文理）・福沢仁之（都立大理）：湖沼堆積物 －地球環境変動の”高精度検出計”－

【国内の湖沼研究】

9:05-9:17　三瓶良和（島根大理）・松本英二（名大・大水圏研）・井上大曳（電中研）・徳岡隆夫（島根大理）：中海堆積物の過去8000年間の有機炭素埋積速度－Carbon sinkとしての汽水域堆積物－

9:17-9:29　井内美郎（地調）・公文富士夫（信州大理）・稲崎富士（土木研）：日光市湯の湖の湖底堆積物中の洪水堆積物

9:29-9:41　福沢仁之（都立大理）：汽水湖沼堆積物における天然の時計としての年縞

9:41-9:53　守田益宗（東北生活文化大）・竹内貞子（斉藤報恩会）・安田喜憲（国際日本文化研究センター）：福井県三方湖湖底堆積物の花粉分析からみた植生変遷

9:53-10:05　川上紳一（岐阜大理）：湖成堆積物に記録された地震イベントの解読とモデリング

10:05-10:17　兵頭政幸（神戸大理）：湖沼堆積物の磁気から得られるベクトルとスカラー情報

10:17-10:21　休憩

【湖沼堆積物の有機物研究】

10:21-10:33　石渡良志（都立大学理）：琵琶湖コアの有機分析から得られる古環境変動の情報

10:33-10:45　福島和夫（信州大理）・田中敦（国立環境研）・石渡良志（都立大理）：堆積物中の有機物に記録された湖水のpH変動－田沢湖と屈斜路湖

10:45-10:57　上村 仁*・石渡良志（都立大理，*現神奈川県衛生研）：水月湖堆積物コアに見られる古環境と有機物組成との関係

【外国の湖沼研究】

10:57-11:09　遠藤邦彦（日大文理）・村田泰輔（埼玉大）・片瀬隆雄（日大農獣医）・綿貫拓野・糸田千鶴・田場穣（日大文理）・兪立中・鄭祥民（華東師大）：中国の湖沼堆積物に基く古環境復元－太湖を中心に

11:09-11:21　柏谷健二（金沢大理）：チベット高原中央部における湖沼の堆積過程と水文環境の変動
11:21-11:33　箕浦幸治（東北大理）・河合崇欣（国立環境研）：Lake Baikal : A recorder of paleoclimate fluctuation
11:33-11:45　中山裕則・田中総太郎（レステック）・遠藤邦彦（日大文理）・菅雄三（広島工大環境）：衛星データによる中央アジアの湖沼変化
11:45-12:15 総合討論

### 3．兵庫県南部地震・緊急フォーラム

兵庫県南部地震・緊急フォーラムは3月28日午後，日本大学文理学部大講堂にて行われます．これは関連学会の代表的研究者による招待講演で構成され，一般研究者からの発表申し込みはすべてポスター発表として受付けられます（3月10日必着．一般講演申込み用紙を用いてプログラム委員長あて）．ただしスペースの制約がありすべての申込みには応じられないことも考えられます．またポスター発表を印刷物の形で残すことは考えられておりません．詳しいプログラムは開催初日以降，受付けでアナウンスします．

### 4．特別講演

下記の特別講演が3月29日13時10分～15時の間，日本大学文理学部大講堂にて行われます．

13:10-14:00　Xavier Le Pichon : What will sea-based data provide for the study of subduction earthquakes ?
14:10-15:00　力武常次　：　地震宏観現象　－果して病的科学か－

## 公募のお知らせ

1．所属：物質・生命情報学専攻　環境情報論講座
2．採用人員：助手１名
3．専門分野：地球環境科学；自然環境そのもの、あるいはその情報の処理についての研究
4．応募資格：（１）博士の学位を持つか、または近い将来に博士の学位を取得見込みの者
　　（２）年齢が３０歳前後あるいはそれ以下の者
5．採用予定年月日：決定後なるべく早い時期
6．提出書類：（１）履歴書
　　（２）業績リスト；全著者名、発行年、論文題目、雑誌名、巻・号、頁の順番で記載する。主要な論文（３編以内）の冒頭に丸印を付し、別刷りをそれぞれ３部提出する。リストの下に所属学会を記入する。
　　（３）研究概要；これまでの研究の概要を1500字程度にまとめたもの。
　　（４）研究構想；今後の研究構想・抱負を1500字程度にまとめたもの。
　　（５）推薦書；推薦状（推薦者の連絡先を明記）１通または応募者本人に関して参考意見を述べることのできる人（１名）の氏名・連絡先。
7.応募書類提出期限：1995年３月31日必着。封書、簡易書留による郵送とし、封筒の表に「環境情報論応募書類在中」と朱書すること。
8.応募書類提出先：〒464-01　名古屋市千種区不老町
　　名古屋大学大学院人間情報学研究科長　横井英夫
9.問い合わせ先：〒464-01　名古屋市千種区不老町
　　名古屋大学大学院人間情報学研究科　西川輝昭（TEL　052-789-4856）

# *1995年 1月17日兵庫県南部地震調査速報会について（報告）*

日本第四紀学会・第四紀研究連絡委員会の主催で「1995年1月17日兵庫県南部地震調査速報会」が2月18日（土）午前10時より日本大学文理学部大講堂において開催された.

冒頭に甚大な被害を出した兵庫県南部地震による犠牲者の冥福を祈って参加者全員により黙悼がささげられた後，日本第四紀学会相馬寛吉会長の挨拶があり，続いて熱のこもった多数の発表が行われ，活発な討論が交わされた．参加者は435名であった．口頭発表は25件，ポスター発表は12件あり，最新の，生々しい報告や斬新な考察などどれも充実した内容であった．また総合討論の冒頭には日本第四紀学会創設者の一人である池辺展生会員より1923年関東大地震と1995年兵庫県南部地震の二つの体験が語られ，さらに松田時彦会員による今後の活断層調査に関わる提案をめぐる議論など，予定の18時過ぎまで総合討論が続けられた．最後は第四紀研究連絡委員会米倉伸之委員長の挨拶で閉会となった.

**プログラム**

日時：1995年2月18日（土）10時～18時

会場：日本大学文理学部大講堂　(京王線下高井戸：東京都世田谷区桜上水3-25-40)

世話人：陶野郁雄（国立環境研）・遠藤邦彦（日大文理）・池田安隆（東大理）

10:00-10:05　開会挨拶 相馬寛吉（日本第四紀学会会長）

10:05-10:25　松田時彦（九州大）：基調報告－兵庫県南部地震－

10:25-10:39　石橋克彦（建築研究所）：1995年兵庫県南部地震のテクトニックな背景と広域地震活動

10:39-10:52　瀬野徹三：兵庫県南部地震のテクトニクス的背景：中部日本－西南日本の応力場

10:52-11:05　吉田明夫（気象研究所）：兵庫県南部地震に関連した地震活動

11:05-11:18　岩崎好規（大阪土質試験所）：地震動と地盤

11:18-11:31　菊地正幸（横浜市立大）：遠地の地震波による震源メカニズムと破壊過程

11:31-11:44　中田 高・蓬田 清・尾高潤一郎（広島大）・坂本晃章（北淡東中）・朝日克彦（広島大）・千田 昇（大分大）：兵庫県南部地震で淡路島に現れた地震断層

11:44-11:57　嶋本利彦・大友幸子・堤 昭人・川本英子（東大地震研）：神戸市・芦屋市・西宮市における地震被害と推定地震断層

11:57-12:10　前田保夫（山形大）・宮田隆夫（神戸大）：神戸－西宮間の活断層の観察

12:10-13:00　休憩

13:00-13:14　岡田篤正（京大）：六甲断層系のネオテクトニクス

13:14-13:26　多田 尭（国土地理院）：1995年兵庫県南部地震と近畿地方の地殻変動

13:26-13:36　鈴木康弘（愛知県立大）・松田時彦（九州大）・中田 高（広島大）・坂本晃章（北淡東中）・尾高潤一郎・後藤秀昭・朝日克彦（広島大）・千田 昇（大分大）・竹内 章（富山大）・吾妻 崇（専大）・岡田篤正（京大）・中村俊夫（名大）：兵庫県南部地震の地震断層の活動歴－北淡町梨本地区でのトレンチ発掘調査－

13:36-13:49　宮内崇裕・伊藤谷生・荒井良祐（千葉大）・村田明広（徳島大）・狩野謙一（静岡大）・前田卓哉（地震研）・長谷川修一（四国総研）・澤田臣啓（サワソフトサイエンス）：兵庫県南部地震に伴う淡路島北部の地表断層調査

13:49-14:02　池田安隆（東大理）・東郷正美（法政大）・澤 祥（鶴岡高専）・加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博物館）・隈元 崇（東大）：墓石のずれから推定される初動分布と伏在地震断層の挙動

14:02-14:15　野村亮太郎（神戸大）・川崎輝雄（神戸大・院）：墓石・石造物の転倒などからみた地震被害分布と地形特性

14:15-14:28　岩淵 洋（海上保安庁水路部）：兵庫県南部地震震源域付近海域の緊急調査

14:28-14:40　太田陽子（専修大）・堀野正勝（国土地理院）・国土地理院災害地理調査班：淡路島における地震断層について

14:40-14:50　熊木洋太（国土地理院）・宇根 寛（同）・国土地理院災害地理調査班・脇坂安彦（土木研究所）・佐々木靖人（同）・太田陽子（専修大）・戸田 茂（京大）：六甲山地周辺地域の活断層と地変

14:50-15:00　堀野正勝（国土地理院）・根本寿男（同）・゜関口辰夫（同）・津沢正晴（同）・国土地理院災害地理調査班：兵庫県南部地震の災害現況と地形特性について

15:00-15:10　地質調査所緊急調査グループ（地質班）：1995年兵庫県南部地震に伴う地震断層と地盤被害

15:10-15:20　地質調査所緊急調査グループ（地下水班）：兵庫県南部地震に伴う地下水変動－淡路島の湧水および静岡県内の地下水連続観測－

15:20-15:30 休憩

15:30-15:50　陶野郁雄（国立環境研）：基調報告－地盤工学の立場から－

15:50-16:04　諏訪靖二（大阪土質試験所）：ウォーターフロント構造物の被害

16:04-16:17　楠田 隆・千葉県地質環境研究室研究員一同：1995年兵庫県南部地震による液状化被害調査・中間報告

16:17-16:30　三田村宗樹（大阪市大）：阪神間の地盤と兵庫県南部地震による液状化被害

16:30-16:40　松本俊幸（応用地質研究会）・1995年兵庫県南部地震地質調査グループ：1995年兵庫県南部地震における被害集中域と地質学的特性

16:40-17:55　総合討論　（司会：杉村 新・陶野郁雄・遠藤邦彦・池田安隆）

17:55-18:00　閉会挨拶 米倉伸之（東大，第四紀研連委員長）

**ポスター発表および展示（大講堂ロビー）**

1) 千田 昇（大分大）・中田 高・蓬田 清・尾高潤一郎（広島大）・坂本晃章（北淡東中）・朝日克彦（広島大）：淡路島に現れた地震断層の位置と変位量

2) 尾高潤一郎・中田 高・後藤秀昭（広島大）：淡路島北淡町小倉地区の地震断層詳細図

3) 国土地理院：平成７年兵庫県南部地震災害現況図

4) 国土地理院：航空写真等で見る兵庫県南部地震

5) 国際航業：災害写真

6) アジア航測：災害写真パネルと淡路島における地震断層のビデオ

7) 大阪土質試験所：

8) 中央開発：

9) 地質調査所緊急調査グループ（地質班）：野島断層に沿う地表変位の精密分布図

10)　復建調査設計：地震断層の空中写真パネルと空中写真図化パネル

11) 池田安隆・澤 祥（鶴岡高専）・東郷正美（法政大）：野島地震断層の最大変位量－変位３成分の精密測定

12) 山科健一郎（東大地震研）：1995年兵庫県南部地震の地変調査，同被害地域概査

**ポストプリントについて**

この速報会の記録（ポストプリント）は３月下旬に刊行される予定です．予定価格は２０００円（送料含む）．入手を希望される方はお名前，送付先，冊数を明記の上，下記へファックスあるいは葉書にてお申込み下さい．支払いは現品送付後となります．

〒156 世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部応用地学教室 遠藤邦彦
Fax:03-3290-5451（直通）

## 震災と第四紀学

日本第四紀学会会長　相馬寛吉

この度の阪神大震災でまたもや人間の知恵の無力さを思い知らされることになった。M８クラスの巨大地震を度々経験済みの我々にとって、今度のM7.2は各種工学・技術のハード面や、それに対応するソフト面の基準の想定をはるかに上回ったものでものであった、で済ましてよいものだろうか。科学的な根拠での地震規模を示すMが、その対策・防災問題となると、それを離れて経済効果優先の妥協的な基準を設定する体質が、もしかしたら我々側にもあったのかも知れぬ事を大いに反省しなければならない。つまり、科学がまだまだ人間のものになっていない点を重大問題として考える必要がある。経済や技術のみでは決して解決しない問題が多々あることを各人が考え、学問に根ざした活発な議論を戦わす必要が、特に第四紀学会としてもあってしかるべきだ。

人類誕生以来の地球の自然環境の変動ないし変遷を、時には人類の農業、鉱工業、エネルギーなどの生産活動と関連させて、学際的・総合的に追求するのが第四紀学で、従来の枠組みでいう理学、工学、農学の諸分野にまたがる。主要な研究対象となる変動ないし変遷の記録が保存されている場が第四紀に形成された地層や地形に多いことから第四紀学と呼ばれ、地道で綿密な野外調査が出発点となることが多い。このようにいうと、この学問の目的は単に過去を知ることにあると短絡的に受けとめる人もいるかも知れないが、大切なのは目的意識がどこにあるかであろう。

ここの調査で得られる多方面からの研究成果とその蓄積は、一方で我々が生活を営む環境の根底にある自然への理解を深め、他方ではそれらを人間社会の本質に関わる問題に積極的に活かす、との目的意識に立つのであろう。この研究成果の蓄積と活用は二者択一でなく不即不離であり、過去と真剣に取り組む姿勢無くしては人知を超えた自然の驚異、それに伴う破壊力を目前にして再度の破局を迎えることになるであろう。破局を迎えないためにも第四紀の基礎的研究の重要性とその社会的意義を人間社会の本質に関わる問題として理解することがなによりも重要である。

（本稿は日本第四紀学会・第四紀研究連絡委員会の主催で２月18日に開催された「1995年1月17日兵庫県南部地震調査速報会」の冒頭における会長挨拶である。）

## 自然史学会連合第一回会議　報告

表記が１９９４・１２・２６に日本学術会議で開催された．自然史科学の重要性を訴える為の具体的活動として、設立総会を５月末に開催して声明を出し、秋にシンポジウムを開催することにした．連合の運営は代表幹事として速水　格が務め、これに動・植・地質の３分野から選出されたメンバーがWORKING GROUPを作ってこれにあたることとした．（相馬寛吉）

### 表紙写真説明

1995年1月17日の兵庫県南部地震に伴い，淡路島北西部の野島断層に添って地震断層が現われた．写真は，中田　高が地震直後にヘリコプターから撮影した北淡町平林の地震断層であり，ここで最大変位が観測された．直交する2本の畔が示す見かけの横ずれ量は有意に異なっている．これは，この地点でわずかな水平短縮成分（0.2-0.3m）があることによる．水平ずれは約2.0m，垂直ずれは約1.2m，ネットスリップは2.4mとなり，水平スリップベクトルの方向は断層線に対してわずかに斜交（約7度）する．
（池田安隆・澤　祥・東郷正美・中田　高）

## *The Fourth International Conference on the Evolution of the East Asian Environment* 報告

鹿島　薫（九州大学）

上記の国際会議は、1995年１月3日から７日まで、香港大学で開催されました。約60人の参加者があり、日本からは太田、熊井、松江、三木、坂本そして鹿島の６名が参加しました。

会議は全体で以下の７つのセッションにわかれており、合計57の講演がなされました。

１地質と古気候
２年代、海成堆積物と陸成堆積物の対比
３環境変化
４レス
５古植生と花粉分析
６第四紀海岸線変動
７人間の進化

また、会議の中日（５日）には２つの一日巡検が（Lantau島、Mai Po)行われました。あわせて、INQUAのQuaternary Shoreline Committeeの会合とその報告がなされました。

参加者が少なかったこと、宿舎も２カ所にまとまっていたこと、さらに巡検参加費とほとんどの昼食夕食が参加費に含まれていたこともあり、アットホームな会議となりました。

全参加者の約半数が中国本土からの参加者であり、英語のハンディギャップを乗り越え、どんどん発表する姿が印象的でした。これにひきかえ、日本からの参加者は少なく、寂しい限りでした。上記のテーマを考えると、数倍の参加者があってもよかったと思いました。サーキュラーの日本国内での案内が悪かったことなど、今後改善すべき点があると思います。

## *１９９５年度学術大会および総会のお知らせ*
## *日本水文科学会*

１．会期：１９９４年6月１７日（土）～１８日（日）
２．会場：日本大学文理学部（世田谷区桜上水3-25-40）Tel：03-3329-1151
３．日程：6月１７日（土）　９時３０分～　シンポジウム，一般研究発表，総会，懇親会
　　　　　6月１８日（日）　９時３０分～１７時　一般研究発表
４．費用：大会参加費　1,000円　（学生　500円）予稿集代　1,500円、懇親会　5,000円

## 公募のお知らせ

１．採用職名及び人員：助手１名
２．所属部門：　生物圏環境科学科（生物圏機能講座）
３．研究分野：　植物生態学（群集生態とくに植生・土壌系、植生環境解析、生態系の物質循環等の究ができる人で、寒冷域の生態系、地球環境変動との関連に興味のある人が望ましい）
４．応募資格：　博士の学位を有するか、着任までに学位審査請求論文を提出できる見込みの者で、学部学生の実習（植生及び土壌調査の実習を含む）及び研究指導の出来る者。なるべく若い人が望ましい。
５．応募書類　1)履歴書　2)研究業績リスト　3)主要論文別刷（コピーも可）　4)これまでの研究概要（2000字以内）5)今後の研究教育に対する抱負（2000字以内）6)推薦書１通
６．応募締切　平成７年５月１２日（必着）
７．着任時期：平成７年７月１日以降の早い時期
８．書類提出先：930富山市五福3190　富山大学理学部長 松本賢一
（封筒に「生物圏環境科学科助手応募書類在中」と朱書し簡易書留で郵送のこと）
９．問合わせ先：930富山市五福3190富山大学理学部生物圏環境科学科　小島 覚
　電話：0764-41-1271,内線2339　FAX: 0764-41-2972（理学部）

# INQUA ベルリン大会(第2回状)

1月に入ってようやくINQUAベルリン大会のSecond Circularが届きました．それによると，大会そのものは1995年8月3日から10日までベルリンのFreie Universityで開催されます．大会前の巡検は早いものでは7月21日から始まります．参加申し込みに関する重要な日程とシンポジウムは次のとおりです．

アブストラクト締切　：　3月15日（Second Circularには2月15日となっていますが，Scientific Programme担当のProf. Frenzelからの手紙では1ケ月延期されたようです）
Registration Form 受付締切　：　4月30日
巡検申し込み締切　：　4月30日
送金締切　：　4月30日（大会参加費，巡検参加費など，大会参加費は一般DM 500. 日本円で約32,500円，これ以降はDM 650）
Second Circular等の問い合わせ先は，
Congress Partner GmbH
Emmastr.220, D-28213 Bremen, GERMANY
TEL　+49-421-21-9073,　FAX　+49-421-21-6419

**<MAIN SYMPOSIA>**

1) Herterich, K., Frenzel, B. & Berger, A.: Tracing the Future Development of Climate on the Basis of Palaeoclimatology.
2) Thiede, J., Sarnthein, M., Broecker, W., Jansen, E., Labeyrie, L. & de Vernal, A.: The Northpolar Sea and the North Atlantic Ocean as Driving Forces for the Global Oceanic Circulation During Various Time Windows of Stable and Transient Climates.
3) Glasser, W.: Groundwater Movement, Consumption, Recharge, Pollution and Self-Regenerating Capacities in Quaternary Soft Rocks.
4) Grube, E.F., Eilssmann, L., Richmond, G., Archipov, S.A. & Kumai, H.: Regional and Worldwide Stratigraphic Correlations.

**<ADDITIONAL SYMPOSIA>**

**Palaeoclimatology and Palaeoceanography**

5) Berger, A.L.: Milankovitch and Quaternary Climate History.
6) Berger, A.L., Duplessy, J.C., Partridge, T.C., Kershaw, A.P. & Iriondo, M.H.: Palaeoclimate of the Southern Hemisphere During the last 140000 years: metachronous with that of the Northern Hemisphere?
7) Billard, A.: Climates of the Middle Pleistocene; Land and Ocean Records.
8) Brown, J.: Cenozoic Ground Ice Stratigraphy.
9) Faure, H.: Forecasting climate on the basis of global palaeo-carbon cycle changes
10) Kropelin, S., An Zhisheng, Derbyshire, E., & Rutter, N.: Paleomonsoon Variations and Global Change During the Late Quaternary.
11) Levkovskaya, G.M. & Pospelova, G.A.: Comparison of the Magnetic Susceptibility of the Sediments and of Some Climatic Oscillations During the Early and Middle Pleistocene in Moldavia and in the Caucasus Mts.
12) Machida, H. & Beget, J.: The Importance of Tephrochronology for Reconstructing Climate History and Environmental Changes in the Past
13) Negendank, J.F.W., Merkt, J., Anderson, R.Y. & Kelts, K.: Paleolimnology.
14) Pachur, H.-J. & Singhvi, A.: Environments in the Axis of the Old World Desert Belt (SaharaCentral Asia) During the Terminal Pleistocene and the Early Holocene.
15) Ringberg, B.: Varve Chronology, Varve Climatology.
16) Sejrup, H.P. & Larsen, E.: Study of the Stage 5 (Last Interglacial / Early Glacial): Climate and Environment in Northern Latitudes.

17) Starkel, L.: Episodes of High Variability in the Hydrological Cycle of the Past.

**Applied Quaternary Geology**

18) Grube, A.: Earth Science Conservation.

19) van Husen, D.: Geotechnical Aspects in Quaternary Soft Rocks.

20) Luttig, G.W.: Applied Quaternary Geology.

21) de Mulder, E.: Quaternary Geology in Urban Centres.

22) Starkel, L. & Annenkov, V.V.: Hydrology of the Last Millennium.

23) Boulton, G.S., Berger, A., Starkel, L. & de Mulder, E.: Simulation of Past and Future Hydrogeological Evolution of NW-Europe.

**Quaternary Stratigraphy**

24) Cita, M.: Marine Sections from Southern Italy Potentially Usable as Standard Reference for the Lower, Middle and Upper Pleistocene.

25) Lindsay, E.H.: Correlation of Eurasian Late Cenozoic Mammal Chronology with the Magnetic Polarity Time Scale.

26) Lundqvist, J. (IGCP 253): Termination of the Pleistocene.

27) Partridge, T.C.. The Pliocene / Pleistocene Boundary.

28) Richmond, G.M.: Potential Type Localities for the Lower-Middle Pleistocene Boundary.

29) Heller, F., Evans, M.E., LOvlie, R. & Thouveny, N.: Magnetism of Quaternary Sediments: Environmental and Palaeoenvironmental Applications.

**Glaciotectonics, Glacial Sediments**

30) Croot, D.G.: Computer Database of Glacitectonic Phenomena Throughout Europe.

31) Lundqvist, J.: Glaciotectonics.

32) Lundqvist, J.:Glacigenous sediments.

33) Piotrowski, J.A.: Drumlins.

**Glaciology**

34) Kuhle, M., Xu Daoming & Grosswald, M.G.: Quaternary and Holocene Glaciation in Asia and its Climatic Implications.

35) Serebryanny, L.: The Problem of Timing and Extent of Pleistocene Glaciations in Polar and High Mountain Regions of the Northern Hemisphere.

36) Li Jijun & Ruddiman, F.W.: The Problem of the Uplift of the Tibetan Plateau and its Bearing on Environmental Change.

**Prehistory**

37) Gullentops, F. & Renault-Miskovsky, J.: European Pleistocene Stages 4, 3 and 2: Men, their Culture and Ecology.

38) Muller-Beck, H.: Archaeology of the Pleistocene / Holocene Transition

**Human Impact**

39) Ammann, B.: Human Impact on Ecosystems.

40) Frenzel, B.: European Palaeoclimate and Man Since the Last Glaciation.

41) Levkovskaya, G.M.: Transition from the Medieval Climatic Optimum to the Little Ice Age.

42) Schulz, E., Roberts, N. & Pomel, S.: The Human Impact: Indicators in Sediments, Soils and Vegetation and their History, most of all in the Mediterranean Region.

**Palaeobiology**

43) Burga, C. & Hooghiemstra, P.: The Biological Role of High Mountain Systems During the Quaternary.

44) von Koenigswald, W.: Taphonomy of Quaternary Vertebrate Assemblages; Biocoenosis versus Thanatocoenosis.

45) Mac Donald, G. & Velichko, A.: Circumpolar Tree Line Changes.

**Global Change / Palaeoecology**

46) Rutter, N. & Morner, N.-A.: INQUA s Contributions to PAGES (Past Global Changes) of the IGBP: A Study of Global Change.

47) Ammann, B.: Rapid Climatic Changes: MultiProxy, High-Resolution Studies of the End of the Last Late Glacial.

48) Jelgersma, S. & Morner, N.-A.: Global Change in the Tropical Zone.

49) Lowe, J.J.: Integration of Terrestrial, Offshore and Ice Core Data for High-Resolution Modelling of the North Atlantic During the Last Glacial to Interglacial Transition.

50) Maher, L.J.: Computers and INQUA. A Symposion on the Use of Computers in the Quaternary Sciences.

51) Pecsi, M.: Palaeogeographical Atlas: Scientific Problems.

52) Petit-Maire, N.: Geological Records of Past Climatic Changes in Coastal Areas of the Tropics and Subtropics.

53) Suguio, K. & Turcq, B.: Amazonia, Past and Present

**Loess and Fossil Soils**

54) Billard, A., Kukla, G. & Shackleton, N.: Pleistocene Loess and Palaeoclimate.

55) Catt, J.A.: Reconstruction and Climatic Implications of Quaternary Palaeosols and Palaeosol Sequences.

56) Smalley, I. J.: Loess in Europe (in memory of Rudolf Grahmann).

**Neotectonics**

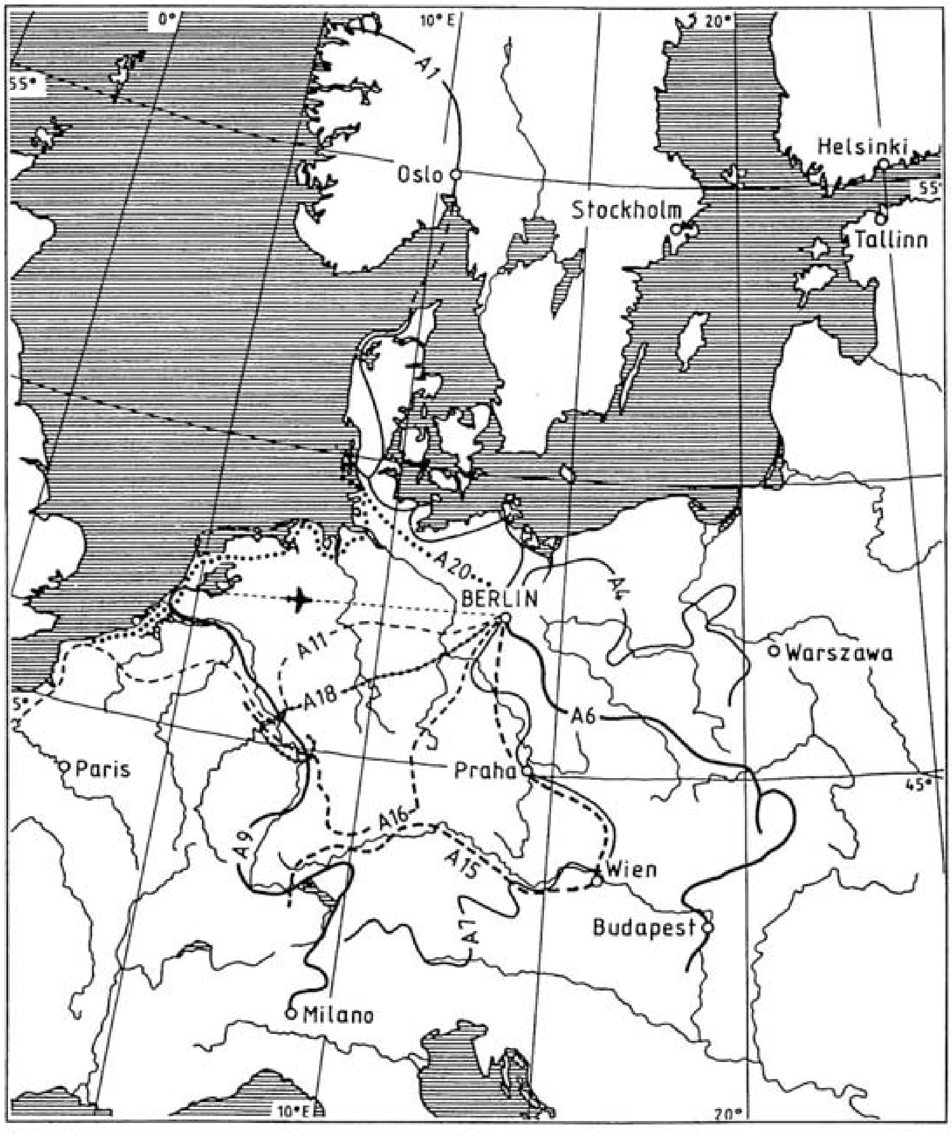
57) Lenotre, N.: Formalization of Neotectonic Maps.

58) Morner, N.-A., Ollier, C. & Dramis, F.: Large Scale Patterns in Neotectonics.

59) Serva, L., Audemard, F.A. & Michetti, A.M.: Palaeoseismicity.

60) Streif, H.: Eustatic and Isostatic Displacements of Shorelines and their Geological/Palaeoecological Consequences.

A PRE-CONGRESS-EXCURSIONS – VOREXKURSIONEN



# Earth Processes in Global Change (EPGC)
# " Climates of the Past" (CLIP)
# Geological Records of Climatic Change over the Last 350,000 Years: The Continental Margins of the Tropical and Subtropical Oceans
# 会員募集について

UNESCO-International Union of Geological SciencesのJoint Program
"Earth Processes in Global Change"にかかわるPilot Projectの" Climates of the Past(CLIP)" から，標記の研究テーマに関するIndividual Associate Membershipの案内がきておりますので，お知らせいたします．
このCLIP-EPGC Programmeの目的は：

1) To facilitate contacts between geoscientists wishing to compare and correlate their results with those in other areas, through the publication and diffusion to members of scientific reports summarizing the members' results and current activities, and through organization of meetings in areas where major research is current or where substantial results have already been obtained.Particular attention will be given to regions with common climatic patterns, where both oceanic (currents, sea level, SSTs) and atmospheric circulation (precipitation, wind...) changes are recorded and may be compared for a better understanding of global change.Among such areas are the tropical zones where human prosperity closely depends upon specific atmospheric patterns (monsoons, cyclones) which are prone to wide changes in activity, frequency and range, the sensitive transitional zones at the present day boundaries of the major climatic belts of the globe, and the coastal zones at the ocean / continent interface, also highly sensitive to global changes.

2) To publish in "Quaternary International" or CIFEG series, the major CLIP results, encouraging the authors to link their local or regional results with the Global Changes recorded in ice, deep sea or long continental cores and with extermal or internal forcings. We hope that a synthetic volume can be produced for Beijing IGC, 1996.

3) A common objective of CLIP members will be to produce, if possible for the consecutive IGCs in 1996 and 2000, paleomaps reflecting the natural state of the world during the last known extreme climatic scenarios, the Last Glacial Maximum (LGM) and theHolocene Optimum (HOP). Those maps will be published at a 1/25000000 scale under the sponsorship of the IUGS UNESCO Commission for the Geological Map of the World (CGMW). The major features which will appear on the final digitized product (2 sheets) are continental masses relative to sea level, ice cover (high laltitudes and Tropics), periglacial soils, coastal traits (deltas, wetlands...) and biomes related with humid to arid environments.

お問い合わせ先・申込先は
Chirman; N.Petit-Maire (LGQ)
CNRS, Luminy, Case907, 13288 Marseille Cedex 9, FRANCE
FAX +33-9126-6638

# 第16期第2回第四紀研究連絡委員会議事録

日時：平成６年12月16日（金）
13時30分から16時30分まで
場所：日本学術会議第３部会議室（５階）
出席者：新藤静夫、池田安隆、上杉陽、大場忠道、熊井久雄、小池裕子、酒井潤一、相馬寛吉、立石雅昭、野上道男、松島義章、米倉伸之
（12名）

議事に先立ち、第１回委員会（10月28日）で選出された研究連絡委員会委員・委員長および幹事の選出について、第１回委員会の議論および結論について確認した。

その結果、日本第四紀学会からの推薦委員と研連推薦委員ば前期と同じ割当数のそれぞれ９名と１名とすること、委員長は米倉委員、幹事は在京の野上・池田両委員、研連推薦委員は太田陽子氏とすることを確認した。以上の確認のもとに、前回議事録を修正の上、承認した。

＜報告＞

１）日本学術会議関係（新藤会員）

(1)日本学術会議の積浜移転は平成９年度に計画されており、建設予定地の視察が行われた。(2)第16期の活動計画について，国際的な学術活動への積極的な貢献のために第７常置委員会が設置されたこと、第４部に６つの小委員会（新しい方式の国際研究所設立、科学教育の振興、サイエンスミュージアム、ＩＧＤＰ（国際陸上学術掘削計画）、構造生物学、学術情報）が設置されたこと、会員推薦方式について検討されること、地質学総合研連（新藤委員長）の構成と発足などが報告された。

２）第15期からの引き継ぎ事項について
（米倉委員長）

太田前委員長からの資料が配付され、15期活動記録と16期研連への申し送りについて、説明があった。熊井委員から、ＩＮＱＵＡ分担金が正常に納入されているかどうか、学術会議事務局に確認することが要請された。

＜審議＞

１）日本学術会議平成７年度代表派遣会議候補者について

上記について、国際第四紀学連合第14回大会（ドイツ、ベルリン市、1995年8月3日～8月10日）に代表を派遣することとし、候補者として第四紀研連委員長を推薦することにした。

２）国際第四紀学第14回大会への活動報告について

上記の大会に日本の第四紀研究の成果を報告するために、どのようなことが可能かを議論して、以下の原案を得たので、次回までに具体案を検討することとした。(1)日本第四紀学会と協力して、研究委員会の活動報告（英文）を作成すること、(2)日本の第四紀研究に関連する最近の出版物（雑誌、単行本、地図など）を展示すること、(3)「第四紀研究」に掲載された論文題目は日本地形学連合の文献データベースに、また大会の発表論文（予稿集）題冨は地質調査所の文献データベースにそれぞれ収録されているので、それらを活用する方法を紹介することなど。

３）国際第四紀学連合の役員推薦などについて

上記について、副会長侯補者を推薦するのが適当であると考えられること、名誉会員侯補者を推薦することを検討すること、研究委員会の設置についても日本から積極的な提案をすることなどか話し合われ、締切りが３月末なので、次回に具体的な検討をすることとした。

４）今期の活動について

前期からの引き継ぎ事項を含めて、自由に全体的な議論をした。ＩＧＢＰ，ＩＧＣＰなどの国際的な共同研究に積極的に関与すること、アジア地域における第四紀研究の推進について国際協力の道を探ること、国内の第四紀に関連する年代測定施設に関する情報を収集し、拡充に努めること、大学などにおける第四紀学の教育体制について検討すること、日本第四紀学会・日本地形学連合・地学団体研究会など研連委員を選出している学会を初めとして関連学協会との協力体制を考えることなどが話し合われた。

５）そのほか12月26日の自然史科学連合の会議には太田委員に出席を依頼することとした。1995年１月20日～21日の「海岸・沿岸域研究を考えるーＩＧＢＰ－ＬＯＩＣＺ研究計画シンポジウム」の後援依頼を承認した。1995年１月26～27日に、日本学術会議で「ＩＧＢＰ国内シンポジウム」が、東京大学海洋研究所で「古海洋環境シンポジウム」が開催されることが報告された。

次回は平成７年３月10日（金）13時30分から17時まで、日本学術会議にて開催予定。

# 日本学術会議だより　№35

# 第16期活動計画決まる

平成６年11月　日本学術会議広報委員会

日本学術会議は，９月28日から30日までの３日間，第 120回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは，総会の概要及び第16期活動計画についてお知らせします。

## 日本学術会議第120回総会報告

日本学術会議第120回総会は，平成６年９月28日から３日間にわたって開催されました。

この中で，①第16期の活動の指針となる「第16期活動計画（申合せ）」を賛成多数で可決しました。その他②第２部世話担当の「環境法学・環境政策学研究連絡委員会」の設置及び第３部世話担当の「技術革新問題研究連絡委員会」を「技術革新・技術移転問題研究連絡委員会」に名称変更することを内容とした日本学術会議会則の改正，③運営審議会附置将来計画委員会を改組して，移転準備委員会を設置することをいずれも賛成多数で可決しました。

なお，活動計画の内容は，下記のとおりです。

## 第16期活動計画（申合せ）

今世紀後半，世界は大きく変化し，今や重大な転換期を迎えるに至った。人類は，多くの新たな問題に直面し，21世紀に向けてその生存と繁栄のための新たな世界秩序を模索している。ここにおいて人類の「知」の適切な行使が求められ，学術に対する期待が高まるとともに，学術自体のあり方もまた問いなおされようとしている。このような世界情勢の中で，我が国の諸活動における学術の重要性はますます増大しており，我が国の将来は一に学術の発展にかかっているといっても過言ではない。

本会議は，科学が文化国家の基礎であるという確信に立って，科学者の総意の下に，我が国の平和的復興，人類社会の福祉に貢献し，世界の学界と提携して学術の進歩に寄与することを使命として設立された（日本学術会議法前文）。その後半世紀にわたり，本会議は我が国の科学者の内外に対する代表機関として，学術の進展に貢献してきたが，上記の学術の重要性にかんがみ，本会議の果たすべき役割は，さらに増大しつつある。

本会議は，その役割を遂行するために，以下のとおり第16期における活動計画を定め，人文・社会科学及び自然科学を網羅する我が国唯一の機関であるという特色を生かしつつ，これに即して活動する。

### １．活動の視点

日本学術会議は，第16期の活動において，以下の視点を重視する。

**(1)　歴史的転換期における新たな展望の探求**

人類の歴史は，今や重大な転換期を迎え，その先行きはきわめて不透明である。人類社会は，21世紀に向けてその未来を切り開くために，学術の発展をますます必要とし，学術の主体性を確立することを求めている。日本学術会議は，学術と社会との深い関わりに思いをいたし，人文・社会科学及び自然科学にわたる我が国の科学者の総意を結集し，人類社会の新たな展望の探求のために，学術が果たすべき役割を考察する。

**(2)　日本の学術研究体制の方向づけ**

学術が果たすべき役割からみたとき，日本の学術研究体制の現状には，早急に改善すべき点が多々存在する。特に，その中軸をなす大学，研究機関，学術団体は，研究の進歩に伴う新たな専門分化や，急速に進行しつつある学術の国際化，情報化に早急に対応することを迫られている。また，これらは，研究上の後継者を含む人材育成における深刻な困難に直面し，その克服の方法を模索している。日本学術会議は，日本の学術研究体制が新たな状況に対応し，人類社会の期待に応える研究成果を生み出すことができるように，その方向づけについて協力する。

**(3)　国際学術活動への積極的貢献**

我が国における学術の国際交流は，従来ややもすると先進諸国の学術を受容することに重点が置かれてきた。しかし，今や我が国には，国際平和の推進や環境問題の解決等，地球的，国際的規模の課題について，自らの研究を充実させつつ，広く世界の学術の発展に積極的に寄与することが求められている。

このため，日本学術会議は，日本の学術が受け身の態勢を脱し，その特色を生かしつつ，世界の学術の発展のためにイニシアティブを発揮することができるように，自らの役割を果たすべきである。

### ２．重点課題

日本学術会議が対応すべき学術上の課題としては，(1)各学術分野に共通する学術研究体制上の当面の重要課題，(2)現在，人類社会が直面している重要課題で，人文・社会科学から自然科学にわたる総合的な知見が必要とされているもの，(3)今後重要となってくると予想される学術的な重要課題のうち，本会議として特に先見性を発揮して研究環境の整備等を訴えるべきもの，が考えられる。

本会議は，これらの中から早急に取り組むべき重点課題を設定し，人文・社会科学から自然科学にわたる全分野の科学者の意見を結集して検討にあたる。

これらのうち，特に緊急な対応を要する課題は，機動的かつ早急に審議を行い，その結果を対外的に発表する。さらに，第16期中に発生するであろう新たな問題についても，遅滞なく対応する。

日本学術会議は，発足して50年近くになるが，本会議そのもののあり方についても常に検討を続ける必要がある。

現時点において取り組むべき重点課題を以下に示す。

**(1)　21世紀に向けての新しい学術の動向**

「知」の総合化や学術諸分野の再編成など，新しい学術の動向を，とりわけパラダイムの転換を中心に把握し，21世紀に向けての学術のあり方について検討する。

(2) **学術研究体制の整備**

① **学術団体の支援・強化方策**

さまざまな困難に直面している学術団体の現状を踏まえ，その支援・強化等の方策について検討する。

② **大学・研究機関における研究基盤の改革**

大学院重点化やセンター・オブ・エクセレンスの構想等我が国の研究体制の新しい動向を把握し，大学・研究機関における研究基盤の改革について検討する。

③ **優れた研究者の養成・確保と教育**

若者が理工系を始めとして長期の学習を要する学術分野を離れる傾向が指摘されていることから，優れた研究者の養成・確保方策について，教育のあり方をも含めて検討する。

(3) **科学者の地位と社会的責任**

女性科学者の研究環境の改善について声明を発した第15期に引き続き，学問・思想の自由，科学者の地位と倫理・社会的責任について検討を深める。特に，我が国の若手研究者の研究環境を改善し，研究意欲を向上させるために，科学者の地位・処遇，研究費の配分，業績評価のあり方等について検討する。

(4) **学術情報・資料の充実・整備**

① **学術における情報化の推進**

今後極めて重要となるデータベースの作成やコンピュータ・ネットワーク・システムの整備など，学術における情報化の推進方策について検討する。

② **公的資料等の保存・施設の整備と公開**

公的資料等の保存，その施設・設備の整備と公開手続の確立についてさらに前進させる。

③ **知的財産権**

急速な情報技術の進展に伴い，顕在化してきた知的財産権の問題について，専門家の養成の問題をも含めて検討する。

(5) **国際学術交流・協力の推進**

① **学術における国際化の推進と国際対応力の強化**

学術分野における国際化の推進と国際対応力の強化方策について，いわゆるメガサイエンスにおける国際協力のあり方をも含めて検討する。

② **国際的にバランスのとれた学術交流・協力のあり方**

欧米諸国との交流に偏っている現状を見直し，バランスのとれた学術交流・協力を実現するために，アジアを始めとする世界の諸地域との学術交流・協力のあり方や交流・協力のための基盤の育成方策について検討する。

③ **学術国際貢献のための新システム**

学術分野における国際貢献のために必要とされ，第15期において検討された新たなシステムの構築について，さらに努力する。

(6) **高齢化社会の多面的検討**

高齢化の急速な進行に直面しつつも，健やかに老いることのできる社会の実現のため，生き甲斐の問題や小児期からのライフスタイルの改善，雇用・年金・医療・福祉など高齢化社会に伴う経済上，法律上の諸問題、高齢化社会に向けての研究開発体制，高齢化社会に適合しうる医療とケアのシステムなどについて，老人医学を始めとする諸科学が協力して多面的に検討する。

(7) **生命科学の進展と社会的合意の形成**

生命科学とその応用の急速な進展のもたらす倫理的，社会的諸問題について，自然科学と人文・社会科学との協力の下に検討し，これら諸問題の解決方策の検討及びこれに対する社会的合意の形成に資する。

(8) **学術と産業**

学術と産業の関わりの実態分析の上に立ち，今日の学術と産業とがそれぞれにとって有する意義と問題点とを明らかにするとともに，企業と大学・研究機関における適切な研究の役割分担や基礎的研究の研究体制など，学術と産業との関係のあり方を行政の位置づけをも含めて検討する。

(9) **地球環境と人間活動**

人類の経済社会活動の拡大等に伴い深刻化している環境問題について，エネルギーや土地の利用などの人間活動との関連や，ライフスタイルのあり方，人口と食糧の問題の検討を含め，持続可能な発展のための方策，及びこれに対する我が国の貢献のあり方について検討する。

(10) **脳の科学とこころの問題**

今後の学術研究において重要な学際的課題となることが予想される脳の科学とこころの問題について，21世紀に向けての学術研究上の課題と展望とを明らかにするとともに，今後の研究体制のあり方について検討する。

(11) **アジア・太平洋地域における平和と共生**

国際的な平和の問題が新たな様相を呈している冷戦後の世界情勢を検討する中で，特にアジア・太平洋地域における平和と安全に関連する諸要因を分析し，貧困の克服と福祉の増進，経済発展と科学技術，文化の相互関係と多様な価値の共存の問題など，平和と共生に寄与するための学術的視点について，アジア・太平洋地域に重点を置いて検討する。

(12) **グローバリゼーションと社会構造の変化**

世界が，国際化・情報化・市場経済化などを通じてグローバリゼーションに向かって大きく変化している中で，我が国の産業空洞化，日本型経営・雇用慣行の変化，多国籍企業や知的財産権の問題，市民生活・文化へのインパクトなど社会構造に生じている新しい課題を洞察し，これに抜本的に対処するため，学術的視点から検討する。

**3．重点課題の審議**

上記の重点課題の審議は，常置委員会及び今期の当初設置する特別委員会（別表２）がこれにあたる。両委員会は，速やかに審議を行い，第16期中（緊急性のあるものについては，１年ないし２年以内）に検討結果を発表する。常置委員会，特別委員会及び研究連絡委員会は，相互の連絡・協力を密にする。

なお，常置委員会及び特別委員会の所掌事項は別表１及び２に示すとおりである。

（別表１及び別表２省略）

※参考

〈常置委員会名〉　　　　（事　項）

**第１常置**—研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織に関すること。

**第２常置**—学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること。

**第３常置**—学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関すること。

**第４常置**—創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関すること。

**第５常置**—学術情報・資料に関すること。

**第６常置**—国際学術交流・協力に関すること（第７常置委員会の事項に属するものを除く）。

**第７常置**—学術に関する国際団体への対応及びその団体が行う国際学術協力事業・計画への対応に関すること。

〈特別委員会名〉

**高齢化社会の多面的検討**
**生命科学の進展と社会的合意の形成**
**学術と産業**
**研究者の養成・確保と教育**
**地球環境と人間活動**
**脳の科学とこころの問題**
**アジア・太平洋地域における平和と共生**
**グローバリゼーションと社会構造の変化**

（注）特別委の検討事項は「２ 重点課題」の関係項に同じ。